

# 目次

## 巻頭言

緒方宏泰	1
------	---

## 寄稿

### LETTER

Mary Anne Koda-Kimble, Pharm.D.	3
日本におけるアプライド・セラピューティックス	
Mary Anne Koda-Kimble, Pharm.D. (翻訳 陳惠一)	5
The Pharmacist and the Application of Evidence-based pharmacotherapy	
Steven R. Kayser, Pharm.D.	6
薬剤師と根拠に基づいた薬物治療の適用	
Steven R. Kayser, Pharm.D. (翻訳 陳惠一)	9
Professionalism and Pharmacy Students...Whose Responsibility?	
Donald T.Kishi, Pharm.D.	12
プロフェッショナリズムと薬学生...誰の責任?	
Donald T.Kishi, Pharm.D. (翻訳 陳惠一)	16
An article from Professor Soraya Dhillon	
Soraya Dhillon Ph.D.	20
ソラヤ ディロン教授からの寄稿	
Soraya Dhillon Ph.D. (翻訳 越前宏俊)	21

## 日本アプライド・セラピューティクス学会記念講演会特集

日本アプライド・セラピューティクス学会の将来像	
日本アプライド・セラピューティクス学会の将来像	緒方 宏泰 22
日本アプライド・セラピューティクス学の船出への期待	
日本アプライドセラピューティクス学会の設立にあたって	山本 信夫 26
日本アプライド・セラピューティクス学会の船出への期待	細田 瑛一 29
日本アプライド・セラピューティクス学会への期待	内山 充 32
日本アプライド・セラピューティクス学への期待	
最適な薬物治療の実現を目指して	関野 秀人 35
薬物治療へのアプローチ	
病院薬剤師の立場から	増原 慶壮 39
保険薬局の立場から	川瀬 祐子 42
保険薬局の立場から	山村 真一 44
大学の立場から	越前 宏俊 48

投稿規程	50
------	----

定款 / 学術大会のお知らせ / 会員のみなさまへ事務局変更のお知らせ / 賛助会員名簿

# 論文要旨

## 日本アプライド・セラピューティクス学会の将来像

日本アプライド・セラピューティクス学会会長

緒方 宏泰

明治薬科大学名誉教授

我が国では1970年に高齢化社会、1994年には高齢社会に入った。人口構造として少子化が同時に進んでおり、少子高齢の社会構造は我が国の避けられない基本構造となってきた。一方、疾病構造も変化し、高齢者の主な死亡は悪性新生物、心疾患、脳血管疾患などの、所謂、成人病が中心となってきた。1999年には、国民医療費は30.4兆円、国民所得に対する割合8.0%、老人医療費11.4兆円で国民医療費の37.6%を占めるに至り、2025年には国民医療費は104兆円、老人医療費56兆円で国民医療費の54%を老人医療費が占めことになると推定されている。

治療の中心を占める薬物治療に於いては、しかも、不合理な薬物治療が行われているケースが未だ多く認められている。治療ガイドライン、EBMに基づく医薬品選択、ジェネリック医薬品の使用促進、OTC薬販売体制の整備など、薬物治療の内容、質、経済性を問う環境が漸く強められてきているが、未だ、医療の中で実効性を有する概念や具体的なシステム形成とはなっていない。

この現状を打破していくためには医師だけでなく、薬剤師など薬物治療を担う者達が、経験的な薬物治療に依存することなく、薬物治療に関して調査、評価、研究などを行い、新たなエビデンスを蓄積し、安心、安全かつ良質な薬物治療を議論、提案し、実践していくことが必要と考える。この認識に基づき、日本アプライド・セラピューティクス学会は設立された。迫り来る医療改革の中で、薬物治療の中心を担う科学を形作るための活動を進めて行きたい。

## 日本アプライドセラピューティクス学会の設立にあたって

山本 信夫

日本薬剤師会 副会長

日本アプライドセラピューティクス学会の設立にあたって、設立記念の会誌に論文をというご依頼を受けた。薬剤師の職能団体である薬剤師会に身を置いていると、つい日々の実務に目が向き、学問的な論文にはあまり縁のない場所での仕事が多くなってしまいがちである。薬学をサイエンスとプラクティスの両面から眺めて、薬剤師のありようを見つめる上では、学問と大上段に振りかざすのではなく、実学としての薬剤師業務とそれをしっかり支える知識としての薬学が、境界なく融合することが不可欠なことと考えている。論文は荷が重すぎるので、本学会設立に薬剤師としての期待を述べることで任を果たした。

## 日本アプライド・セラピューティクス学会の船出への期待

細田 瑳一

財団法人 日本心臓血圧研究振興会附属 神原記念病院 理事長

20世紀後半からの半世紀に新しい薬剤の開発が著しく進展した反面、副作用による医原病、薬害も生じるようになった。薬学会、薬理学会、臨床薬理学会、薬剤疫学会、TDM学会などそれぞれの専門分野で臨床現場での薬剤の有効・安全な使い方が研究され、薬剤併用の得失についても多くの経験が集積され、わが国の医療の中心的役割を果たしつつ発展して来たが、技術開発による専門信仰や過剰治療の弊害も見られている。近年GPCの定着と多くのCTRによる、いわゆる科学的薬物使用による薬効評価と治療指針が示されると共に、調査研究のreal worldでの実態も明らかにされるようになってきている。私の携わった開発研究、調査研究と臨床研究のいくつかを振り返りながら、本学会の発会に当たっての祝辞としたい。

## 日本アプライド・セラピューティクス学会の船出への期待

内山 充

薬剤師認定制度認証機構

筆者は、薬剤師の生涯学習の視点から、日本アプライド・セラピューティクス学会の発足に、大きな期待を寄せている。本学会は、薬剤師による『患者中心のケア』を目指した『薬物治療マネジメント』を具体的に実行するために必要な、基盤的な能力・適性を高めることを活動目標においている。それは、生涯学習を計画的に継続し実行している薬剤師にとって、会員との交流を通じて、知識の応用・実地適用に必須の『評価能力』を養い、自らの考えを検証する最適の場になるであろう。さらに、本学会が、薬剤師がともすると陥りやすい固定観念や消極性を克服して、薬剤師実務の中に新しい社会的価値を確立する途を拓く役割を果たすことも期待されるところである。

## 日本アプライド・セラピューティクス学への期待

最適な薬物治療の実現を目指して

関野 秀人

厚生労働省医薬食品局審査管理課医療機器審査管理室長(前総務課薬事企画官)

日本アプライド・セラピューティクス学会の設立は、わが国の薬物治療の今後に期待を抱かせる出来事である。特に、昨今の医療において薬物治療が中心的位置にある状況下、薬物治療に関する学術の進歩とその普及・向上は、国民が大いに期待するところである。そして、薬剤師は「国民の健康な生活を確保する」任務を担っている以上、薬の専門家として薬物治療に積極的に先頭に立って関与することが期待され、アプライド・セラピューティクス学の発展に寄与するとともに、資質向上に努めることによって、医師等と協働して患者・国民に最適の薬物治療を提供することを願っている。

## 薬物治療へのアプローチ ～ 病院薬剤師の立場から ～

聖マリアンナ医科大学病院 薬剤部

増原 慶壮

薬剤師は、ファーマシューティカルケアの理念に基づき、患者に安心・安全な医療を提供するために、医師と薬剤師が協力し、患者の医療費の負担を最低限に抑えながら、良質な薬物治療を提供しなければならない。このためには、薬物治療に特化し、医師・薬剤師を始めとする医療従事者が、薬物治療について広く議論し、国民の健康・福祉に寄与すべきと考える。ファーマシューティカルケアの理念に向かって実践することとして、適切な薬物治療とアウトカムの確保、Dispensing・医療用具の供給、健康の増進と疾病の予防、医療システムの管理を説明し、さらに病院薬剤師がファーマシューティカルケアを実践するための基本と薬科大学・薬学部の教育ありかたについて述べる。

## 「薬物治療へのアプローチ」 - 保険薬局の立場から -

川瀬祐子 Yuko Kawase

(株)アインメディカルシステムズ

保険薬局における患者情報は、処方箋の内容を基礎に患者からのヒアリングによるため、各疾患の診療・治療ガイドラインの周知が重要である。しかし現在は「服薬指導」の内容は、薬剤師個人の能力に大きく依存しており、患者が受ける内容に差が生じる可能性がある。

薬剤師に期待される社会的役割、重大副作用の初発症状の判断を行うに当たって、一歩踏み込んだ「診断に近い判断」が必要となるが、現在この方法は確立されていない。今後保険薬局の薬剤師が行う「薬物治療へのアプローチ」には、全国の保険薬局の薬剤師が共有できる、エビデンスに基づいたガイドラインが必要であると考えられる。

## 「薬物治療へのアプローチ」 - 保険薬局の立場から -

山村 真一

プライマリーファーマシー

現在の厳しい社会情勢は、本来あるべき薬剤コストマネジメントシステムとしての医薬分業が期待通りに機能する事を強く求めている。医薬分業の歴史を振り返ってみると、インフラの進展に力点を置くがあまり、期待されていたコストマネジメントへの意識が未成熟のまま進展してしまった点は問題であった。そのような中、薬物治療に安全・安心・有効で合理的という概念に加え、医療経済上のアウトカムへのアプローチを謳ったこの学会は、正に時代の要請を受けたかの如く誕生する。医薬分業が社会インフラとして今後存続しうるか否かは、薬剤師が、国家、国民からの期待を敏感に察知し、その期待に適うように機能するか否かにかかっている。

社会経済状況が厳しさを増す現在、患者への薬物供給の最終ゲートキーパーである薬剤師に期待される業務は多く存在する。この学会が薬局の社会的存在意義向上に、学術的側面から貢献する事を願いたい。

# 薬物治療へのアプローチ 大学の立場から

越前 宏俊

明治薬科大学 薬物治療学

薬剤師の薬物治療への介入の要請は社会の高齢化と医療人-患者関係の構造的変化に伴う歴史的な必然である。既に先進諸外国ではこの変化は急速に進みつつあり、我が国の薬剤師が新しい医療の枠組みのなかで独自の存在感を発揮するために薬物治療への介入力を可能とする実践治療(applied therapeutics)能力を養成しなければならない。薬剤師教育の6年制は、その変化を推し進める原動力となる必要があり現在急速な教育改革が進行しつつある。